

するとそこに、ヤイロと言う人が来た。この人は会堂長であった。彼はイエスの足元にひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。(ルカ8:41～42a)

イエスは娘の手を取って、「子よ、起きなさい」と呼びかけられた。すると、霊が戻って、娘はすぐに起き上がった。イエスは何か食べ物を与えるように指図をされた。両親は非情に驚いた。イエスはこの出来事を誰にも話さないようにお命じになった。(ルカ8:54～56)

主イエスはゲラサからガリラヤに戻って来られた。群衆は、主イエスの帰りを待ちわびていたので、大喜びで迎えた。するとそこへ、ヤイロという会堂長が来た。彼は主イエスの足元にひれ伏し、12歳ぐらいの一人娘が死にかけているので、自分の家に来て、助けてくださるよう求めた。彼は額を地面にこすりつけ、なりふり構わぬような姿で、娘の癒やしを懇願した。主イエスは、彼の求めに応じて、彼の家に向かった。

この光景は、主イエスにとってはいつものことであったが、民衆にとっては奇異な光景であった。会堂長は、会堂で行われる全てを取り仕切る、町長のような存在である。そして、会堂長は礼拝に責任を負っているため、当然、会堂で律法を教えるファリサイ派の人々と親しい関係にあった。当時、ファリサイ派の人々は主イエスと対立し、敵対関係にあった。会堂長は、日ごろ親しくしていたファリサイ派の人々にではなく、彼らと敵対関係にあった主イエスに助けを求めた。足元にひれ伏して、身をかがめ、哀れなほどに懇願する会堂長の願いに応え、主イエスが彼の家に向かうのを見て、民衆は、興味津々であった。大勢の群衆が成り行きを見たいと、押し合いへし合いしながら、二人の後を追った。

その途中、出血の止まらない女が飛び込んで来て、時間を費やした。癒やされた女と主イエスが話している時に、会堂長の家から使いの人が来て、「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません」と、一人娘の死亡が告げられた。これを聞いていた主イエスは会堂長に、「恐れることはない。ただ、信じなさい。そうすれば、娘は救われる」と言われた。会堂長は、使者の娘は死んだという報告と主イエスの「娘は救われる」という言葉の狭間に立って、どちらが本当なのかと心が揺れ動いた。会堂長の家に着いてから、主イエスはペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに子どもの父母の他には、誰も娘のいる部屋に入ることをお許しにならなかった。人々は、若い娘の死を悼んで、泣き悲しんでいた。会堂長は絶望しただろう。主イエスは、「泣かなくてもよい。娘は死んだのではない。眠っているのだ」と言われた。人々は娘の死を知っているので、主イエスの言葉を嘲笑った。主イエスは娘の手を取って、「子よ、起きなさい」と言われると、霊が戻って、娘はすぐに起き上がった。娘に食べ物を与えるように指図をされた。両親は、驚き、娘の生き返りをどれほど喜び、感謝したのだろうか。主イエスは、例によって、このことを誰にも話さないように口止めされた。

この奇跡は、娘の失神状態を死と受け止めていたのを、主イエスは目覚めさせたと伝えているのではない。著者ルカは、主イエスは十字架の死から命へと復活した神の子キリストであるから、死を生に変えられる方であると告白している。人は死という絶望に直面させられることがあるが、主イエスは「命」へと導かれるという喜びのメッセージである。